保存運動の経過と残された記録資料に関する考察

—旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究（その2）—

A STUDY OF THE PROCESS BEHIND THE PRESERVATION MOVEMENT AND THE RECORD MATERIALS FROM SURVEYS THEREAFTER

— A study on relocating and reconstruction the former imperial hotel (2) —

大内田史郎 — * 1 本橋 仁 — * 2
中川 武 — * 3

Shiro OUCHIDA — * 1 Jin MOTOHASHI — * 2
Takeshi NAKAGAWA — * 3

キーワード：
旧帝国ホテル, 保存運動, 武藤章, 明石信道

Keywords:
The former imperial hotel, Preservation movement, Akira Muto, Shindo Akashi

The purpose of the study is to reveal the full picture of the relocation and reconstruction of the Former Imperial Hotel (1923-1968) designed by Frank Lloyd Wright (1867-1959) and to investigate the “preservation of the architectural style” proposed by Yoshiro Taniguchi (1904-1979), the first director of the Museum Meiji-Mura. This paper (part 2) looks at the process behind the preservation movement of the Former Imperial Hotel, which resulted in its relocation, and examines the survey records obtained by Akira Muto laboratory of Kogakuin University and the documentary photography taken by Shindo Akashi laboratory of Waseda University during its dismantling.

1. はじめに

フランク・ロイド・ライト(1867-1959)の設計による旧帝国ホテル(1923-1968)は1923年に竣工したが、客室数の少なさや老朽化の問題から1967年に建て替えが発表され、1968年に解体された。その解体に対し保存運動が展開され、解体直前に中央玄関部のみが愛知県犬山市の博物館明治村に移築されることが決定したが、その解体から現在の姿に至るまでには実に17年間もの歳月を要している。

筆者らは、資料調査やヒアリング調査などを通して、解体・移築の全貌を明らかにすることで、博物館明治村の初代館長であった谷口吉郎(1904-1979)らが提唱した「様式保存」という方針に対する具体的な方法を明らかにすることを目的としている。これまでに早稲田大学の明石信道(1901-1986)が中心となって行った解体時の実測調査に関する記録資料と、旧帝国ホテルの中央玄関部の移築に伴う主な解体材料と復原材料について報告¹⁾した。なお、前回報告事項の一部(明石信道研究室による実測図面の寄贈経緯)に修正があり、注釈にてその詳細も示す²⁾。

本稿(その2)では、移築に至る保存運動の経過に関して各団体の運動についてまとめ、考察を行った。また、それら諸運動のうち、工学院大学武藤研究室による実測調査の記録と、早稲田大学明石信道研究室によって撮影された解体時の記録写真について報告する。なお、本研究は早稲田大学と工学院大学との共同研究として2015年度から進めているものである³⁾。

2. 旧帝国ホテル解体時の保存運動の経過について

まず、旧帝国ホテルの解体時の保存運動の経過に着目して、株式会社帝国ホテル、日本建築学会、帝国ホテルを守る会、博物館明治村、そして幾つかの大学が、旧帝国ホテルの解体という問題にどのように反応し活動したのかについて、文献調査⁴⁾や当時の関係者からのヒアリング調査によって得られた情報を団体ごと整理し、表1の通りにまとめた。さらに、本研究の過程で明らかになった当時の工学院大学による実測調査について述べる。

2.1 株式会社帝国ホテルの動き

旧帝国ホテルの保存運動は、旧帝国ホテルを取り壊して新しい高層ホテルを建設するという計画に関して、1967年3月16日に朝日新聞⁵⁾が報じたことに幕を開ける。実際にホテルの老朽化も著しく、株式会社帝国ホテルは当初から解体・建替えの意向は強かった。しかしながら、後述する「帝国ホテルを守る会」をはじめとする建築家や専門家から寄せられる多くの保存に関する意見や、博物館明治村の谷口館長らの働きかけによって、最終的には旧帝国ホテルの中央玄関部の移築を博物館明治村へ委任することとなる。

2.2 日本建築学会の動き

日本建築学会の主な動きとしては、まず1967年5月22日に「帝国ホテル旧館の保存に関する要望書」を帝国ホテルの犬丸徹三(1887-1981)社長宛に提出している。当初、この要望書は榎木亨弘(1901-1992)文部大臣や美濃部亮吉(1904-1984)東京都知事らを訪問

¹⁾ 工学院大学建築学部 准教授・博士(工学)
(〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2)

²⁾ 京都国立近代美術館 特定研究員・博士(工学)

³⁾ 早稲田大学名誉教授/博物館明治村 館長・工博

⁴⁾ Assoc. Prof., Faculty of Architecture, Kogakuin Univ., Dr. Eng.

⁵⁾ Assistant Curator, The National Museum of Modern Art, Kyoto, Dr. Eng.

⁶⁾ Prof. Emeritus, Waseda Univ. / Director, The Museum Meiji-Mura, Dr. Eng.

した上で公表される予定であったが、突然中止された⁷⁾。

そして、その後の保存運動は後述する「帝国ホテルを守る会」が中心的な役割を担っていくことになる。その他の主な動きとしては、11月6日に「現地保存が最適であり、また技術的に可能である」という意見書を釧木文部大臣、文化財保護委員会、大丸社長に提出したほか、7月13日には「帝国ホテルの保存について」という座談会を開催しており、その出席者は、池辺陽(1920-1979)、稲垣栄三(1926-2001)、関野克(1909-2001)、高山英華(1910-1999)、前川國男(1905-1986)の5名で、司会は山本学治(1923-1977)が務めていた⁸⁾。

2.3 「帝国ホテルを守る会」の動き

雑誌『新建築』1967年9月号には「発足した「帝国ホテルを守る会」⁹⁾と題された記事が確認できる。それによれば「帝国ホテルを守る会」は著名な建築家や作家、歴史家等の23人¹⁰⁾が発起人となって1967年7月18日に発足された団体で、12月5日に博物館明治村に中央玄関部の移築を委任するまでの間、保存運動の第一線に立っていた団体であり、なかでも池辺陽、稲垣栄三、天野太郎(1918-1990)、沖種郎(1925-2005)、桐敷真次郎(1926-2017)、奥村昭雄(1928-2012)らが中心となって活動を行っていた。

「帝国ホテルを守る会」の主な活動は、多方面に保存運動の働きかけを行うとともに、各地の街頭での署名運動の実施、「帝国ホテルを守る会ニュース」という冊子の発行を通して、世間に旧帝国ホテルの解体に対する警鐘を鳴らしたりすることであった。また、7月27日には当時の佐藤栄作(1901-1975)総理大臣、福永健司(1910-1988)官房長官、中曽根康弘(1918-)運輸大臣、釧木文部大臣、美濃部都知事らに保存の要望書を提出して協力を要請した。同会が重視したのは「旧帝国ホテルの現地保存」であった。しかしながら、この目的を達成するためには建物自体の老朽化や資金の面からも難航を極めた。その結果として旧帝国ホテルの解体を免れることは出来ず、最終的には博物館明治村に移築を容認せざるを得なかった。

なお、これらの活動の最中、ライトの最後の妻であったオルギヴァンナ・ロイド・ライト(1898-1985)が、タリアセンのスタッフ達と1967年10月22日から10月29日まで来日している。10月25日に開催された講演会では、桐敷真次郎や三沢浩(1933-)らと旧帝国ホテルの保存問題に関する講演を行い、旧帝国ホテルの保存を訴えるとともに、釧木文部大臣や美濃部都知事やとも会談を行い、協力を取り付けることに成功した¹¹⁾。その後、佐藤総理大臣が11月15日に行った記者会見の中で旧帝国ホテルの価値を認め保存に対して前向きな姿勢を見せたが、11月21日の記者会見では「建物の一部でも「明治村」にでも引き取ってもらえばいいだろう」と語った。この発言が博物館明治村への移築が決定する非常に大きな要因になったことは明らかである。

2.4 博物館明治村の動き

当初、博物館明治村は、移築に要する費用が莫大なことや、直ぐに復元しなければならない建物が他に多く存在していたこと等から、旧帝国ホテルの移築に対しては難色を示していた。

しかし、解体工事が進む1967年12月26日に谷口吉郎館長が佐藤総理大臣と面会し、政府協力の条件の下で博物館明治村への移築を受け入れることを決定した。そして直後の12月28日に「博物館明治村建築委員会」が開催され、旧帝国ホテルの中央玄関部を博物館明治村へ移築することが決定された¹²⁾。

2.5 各大学の動き

早稲田大学は、株式会社帝国ホテルから旧帝国ホテルの実測調査を唯一許されていた。明石信道の記した当時の日記¹³⁾には、「最終的に写真約3,720枚、スケッチ約600枚、実測図面約60枚を記録した」とある。早稲田大学中央図書館には、後述する解体時の記録写真や実測図面が現在も保存されている。なお、解体時の記録写真については本稿において後述する。

東京大学では、当時太田博太郎研究室の助手であった福田晴虔(1938-)が『朝日ジャーナル』の1967年6月4日号に「帝国ホテルの保存」という論考を発表した¹⁴⁾。これは都市における場所の記憶と都市構造との関連性から旧帝国ホテルの価値を論じたものであり、このような学術的な論考が基礎となって、その後の「帝国ホテルを守る会」の発足へとつながっていくこととなる。

東京芸術大学では、奥村昭雄と永橋為成(1937-)らが中心となり1967年9月28日に教官有志92名によって「旧帝国ホテル保存に関する声明書、要望書」を発表し世論へのアピールが行われた¹⁵⁾。

2.6 工学院大学武藤研究室による実測調査

前述した雑誌『新建築』での特集記事の一つ、沖種郎の「帝国ホテル旧館第3次保存運動」¹⁶⁾には「数年前から工学院大学の自主研究の形で実測が行われ、主な断面図がすでに作製されたが、詳細な記録はないので今後写真測量技術を用いて正確な実測を計画しなければならないはずである。」と記されていた。

そこで、当時の関係者について調査した結果、アルヴァ・アアルトのもとで建築を学んだ武藤章(1931-1985)¹⁷⁾の奥様であった武藤敦子氏とご息女の武藤かおり氏へのヒアリング調査によって、工学院大学武藤章研究室の学生達が実測調査に携わっていたことが分かった。武藤邸では旧帝国ホテルに関する42枚¹⁸⁾の青焼き図面が確認されたが、いずれも作図途中の段階の実測図面であった(写真1)。なお、『新建築』1967年12月号には武藤研究室作成とされた断面図¹⁹⁾が掲載されているが、同図面は含まれていなかった。

写真1 工学院大学による旧帝国ホテルの実測図面の一例

このような資料の確認とともに当時の調査背景を探るため、武藤章研究室の学部4年生として当時実測調査に携わっていた中村勝氏へのヒアリング調査を実施した。その結果、この実測調査は武藤研究室の5名²⁰⁾が卒業論文の一環として1965年度に実施していたもので、実測調査はその後1967年度まで3年間継続されたこと、東京芸術大学の奥村昭雄研究室と共同で行われていたことが分かった。なお、先に述べた早稲田大学明石研究室が行った実測調査とは関係を持っていない。当時の工学院大学にはフランク・ロイド・ラ

イトとともに旧帝国ホテルの設計に携わった遠藤新の弟子である樋口清(1918-)や、タリアセンでライトに師事した天野太郎が在籍していた²¹⁾。このことが、工学院大学が旧帝国ホテルの実測調査を実施に至った要因であると推察される。さらに、本調査が解体の発表以前より行われていることから、保存運動を発端とした他の運動とは異なり、むしろ旧帝国ホテルを純粋な研究対象としての興味に基づいた活動して考えられるであろう。

表 1 旧帝国ホテルの移築に際する主な出来事と関係団体

年	月	日	出来事	関係団体
1965			工学院大学武蔵章研究室が実測調査に着手(～1967)	工学院大学
1967	3	16	朝日新聞に帝国ホテルの解体に関する記事が掲載	
1967	5	22	『帝国ホテル旧館の保存に関する要望書』を提出	日本建築学会
1967	6	4	『朝日ジャーナル』6/4号に「帝国ホテルの保存」が掲載	東京大学
1967	7	13	『帝国ホテル旧館の保存について』の座談会が開催	日本建築学会
1967	7	18	『帝国ホテルを守る会』が発足	帝国ホテルを守る会
1967	8		早稲田大学明石信道研究室が実測調査に着手(～1968.2)	早稲田大学
1967	9	28	『旧帝国ホテル保存に関する声明書、要望書』提出	東京芸術大学
1967	10	22	オルギヴァン・ロイド・ライトが来日(～10/29)	帝国ホテルを守る会
1967	10	25	帝国ホテル保存に関する講演会が開催	帝国ホテルを守る会
1967	11	6	帝国ホテル保存に関する意見書を提出	日本建築学会
1967	11	21	佐藤栄作総理大臣が博物館明治村への移築について言及	
1967	11	22	帝国ホテルから博物館明治村へ移築の受け入れを依頼	博物館明治村
1967	12	1	帝国ホテルの解体工事着手(中央玄関部を除く)	
1967	12	1	『新建築』12月号に武蔵章研究室の実測図が掲載	工学院大学
1967	12	26	谷口吉郎館長が佐藤栄作総理大臣と面会	博物館明治村
1967	12	28	『博物館明治村建築委員会』にて中央玄関部の移築が決定	博物館明治村
1968	1	19	中央玄関部の解体工事着手	
1968	2	25	全ての解体工事が完了	
1972	8		『旧帝国ホテルの実証的研究』が発刊	早稲田大学

3. 解体時の記録写真について

次に、明石信道らの活動によって撮影された解体時の記録写真について述べる。同資料は現在3つの箱にまとめられて早稲田大学中央図書館に保存されており、写真は「紙焼き写真」「アルバム」「ネガ」の3種類の状態で収められていた。なかでも、アルバム化された写真は、明石信道研究室によって調査後にまとめられたものであり、調査者の意図が含まれる貴重な資料である。そこで、まずこのアルバムの整理と検証に着手した。なお、これらのアルバム化された記録写真の総体は表2の通りで²²⁾、アルバム化されていた写真は、全21冊のアルバムに紙焼きの写真(写真2)²³⁾は1,395枚、ベタ焼き²⁴⁾(写真3)²⁵⁾は1,327枚、それぞれ収録されていた。

表 2 アルバム化されていた写真資料の一覧

No	アルバムの表題 (表紙に記入されていた内容)	写真 (枚)	ベタ 焼き (枚)
1	LOBBY:1	89	0
2	LOBBY:3(外+内)	54	0
3	LOBBY:5	102	0
4	LOBBY:6	144	0
5	31:BRICK TILE	63	0
6	32:石	42	0
7	33:石	40	0
8	34:石	19	0
9	20:Pencock 内部構造_西北・北・北東_Reception	94	0
10	22:南客室棟・北棟一連・小塔	103	0
11	23:北客室棟・小塔・グリル入口	78	0
12	24:北棟・窓・能・立面補足	75	0
13	25:北棟・腰石・屋根腰石	87	0
14	26:客室棟・廊下・建具・家具・隠れ造型・スラブ	105	0
15	27:客室構造・スラブ・売店・南棟解体・客室改修_とりこわし	96	0
16	29:杭_EX-JOINT→被害	73	0
17	1・M・H Film 原簿:I	0	638
18	1・M・H Film 原簿:II,Color	21	582
19	1・M・H Film 原簿:IV	0	107
20	ETC:1	47	0
21	3:MAIN ENT. (B)/POND. STATUE. IMH	63	0
	合計(枚)	1,395	1,327

写真 2 紙焼き写真の一例

写真 3 ベタ焼きの一例

3.1 アルバム写真資料の整理

以下の方法で、写真の整理を行った。なお検証を行うにあたっては、アルバムの写真1枚毎に番号を付与した上で、①写真番号、②写真サイズ(縦(mm)×横(mm))、③写真種別(外観・内観・部位)、④撮影箇所、⑤撮影部位、⑥撮影者の位置、⑦撮影時期(解体前か解体中)、⑧写真上の記述の有無、⑨記述内容(左記⑧で記述有りの場合)、⑩その他気づいた事柄の10項目についてリスト化した。

図1の写真を例に挙げて説明すると、①写真番号はアルバム1冊目の1頁目の1枚目なので「album01-P.1-1」、②写真サイズ「縦116mm×横163mm」、③写真種別「外観」、④撮影箇所「正面玄関部」、⑤撮影部位「屋根部分」、⑥撮影者の位置「南客室棟」、⑦撮影時期「解体前」、⑧記述の有無「有」、⑨記述内容「899」となり、このような方法で全ての写真を整理した。

3.2 アルバム写真資料の検証

次に、リストに基づきアルバム写真資料に関する検証を行った。まず写真サイズは、最小のものは縦92mm×横24mm、最大のものは縦153mm×横225mmとバラつきが見られた²⁶⁾。これらは、一部の写真について、整理に際し不要な部分をカットして、トリミングが行われているためであり、そのため写真のサイズが統一されていない。写真種別は、主なものとして「外観」が436枚、「内観」が172枚、「部材」が354枚で、その他にも部分的な写真のために判別出来ないものもあったが、外観写真が約7割と圧倒的に多数を占めていた。撮影箇所は、主に「正面玄関」と「北客室棟」が多数記録されており、内観としては「正面玄関」や「大食堂」の大谷石等の部材の装飾が多く、客室内では解体前の備付家具のみが記録され、客室内で使用されていたと思われる家具は別に記録されていた。また、撮影箇所ごとに分類された上でアルバムとして整理されていたが、同じページに配された写真にも撮影時期は混同している場合も見受けられ、数枚の写真をつなぎ合わせて構成されている写真もあった。これは、パノラマのアングルや見上げから見下ろすまで等、1つの連続した場面として残したい場合に用いられていることが分かり、後述するアルバム作成の意図として考察した。

撮影部位と撮影者の位置については、周辺の建物や同じ頁に収められている写真から特定することが出来た。また、写真には直に数字やアルファベットなどの情報が記述されているものが見うけられた。同じ数字が記されている写真を見比べてみると、同じ撮影箇所または同じ撮影部位が多いことが確認でき、写真を整理するために記されたものであることが分かる。しかしながら、数字が記されている写真でも取消し線で訂正されているものも幾つか見受けられたため、写真上の記述の意味については今後さらに検証を要する。

3.3 写真のレイアウトにみるアルバム作成の意図

先述したように、アルバムは撮影日順ではなく、撮影対象ごとにまとめられている。つまり、その記録の態度から調査者である明石

信道研究室の関心は、工事の経過ではなく、旧帝国ホテル自体の記録に向いていたと言えるだろう。そのための方法として、具体的には次のような記録の方法が取られている。

- ① 2枚以上の写真を組み合わせることによる連続した記録(写真4)
- ② 2枚以上の撮影対象との距離を変えた細部と全体の記録
- ③ 工事前後の写真を並置し意匠・構造を相互に見せるもの

この記録手法の特徴は、同時期に記録された博物館明治村による記録写真と比較することで、より浮かび上がる。同館には、移築の決定後に、前述の「博物館明治村建築委員会」の委員でもあった、飯田喜四郎氏によって撮影された現地での記録写真が残っている。この記録写真は、「様式保存」という方針のもとで行う移築のための事前調査のために撮影され

写真4 組み合わせの一例

た²⁷⁾。これらの記録写真には、それぞれの写真にキャプションがつけられている。それらは具体的には以下のようなものである。

- 例1「(4-35) 取り壊し中の北塔屋。北回廊外側列柱上の柱の主筋は塔屋壁体中に写真にみるように曲げて定着されていた。」
- 例2「(5-16) 玄関ボックス。大谷石カマチは当初はレンガ 2 枚分だけ厚いものであった。電話ボックスに改修したときに薄いものに取りかえた。レンガ 2 枚の目地は乱れている。」

以上のように、実測の記録だけでは残すことのできない、主に大正期の施工がいかにして行われているかにむしろ焦点が当てられているといえるだろう。こうした他のアルバムと比較すると、明石信道研究室は意匠に着目し、その記録のためのアルバム作成に注力されているといえる。それは、これらの調査が最終的には明石信道著の『旧帝国ホテルの実証的研究』として、その意匠設計に着目した書籍が出版されるという事実からも窺うことが出来る。

4. まとめ

旧帝国ホテルの保存運動については、団体ごとに経過を整理するとともに、その中で当時の工学院大学の実測調査の状況が確認され、当時の大学の体制との関連を窺うことが出来た。前述したように現時点では一部の青焼き図面が発見されたのみで、実測担当者の氏名や寸法の記述が無いため不明な部分も多いため、今後も資料調査を継続し 3 年間の調査の全貌を明らかにしたい。

アルバム化された記録写真については、全写真の整理を行ったことによって全貌を明らかにするとともに、アルバム化の方法等から明石信道の意図を把握することが出来た。こうしたアルバムの性格からも、明石信道研究室による調査は、他の団体における保存運動とは一線を画す意匠に着目した調査であったと言えるであろう。

5. 謝辞

本研究に関する調査に際しては、元博物館明治村の飯田喜四郎様と西尾雅敏様、武藤章の親族である武藤敦子様と武藤かおり様、福田晴彦様、阿部幸正様、前野崑様、中村勝様、早稲田大学中央図書館、博物館明治村にご協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。

註

- 1)西尾雅敏:『帝国ホテル中央玄関復原記』, 博物館明治村, 2010, p. 83とp.111によれば、1976年3月に躯体と外装が完成し、その後1985年10月に内装が完成している。

- 2)大内田史郎, 豊島麻由佳, 本橋仁, 渡邊舞, 中川武:「旧帝国ホテルの解体から移築に関する研究(その1) 明石信道研究室による解体時調査と解体材料及び復原材料に関する考察」,『日本建築学会技術報告集』第23巻第24号, pp. 711-714, 2017
- 3)前回の報告において、明石信道研究室による実測図面が早稲田大学中央図書館に寄贈される経緯について記した。報告内容において「資料の劣化が進んでいるため、中央図書館へ寄贈され、その後修復がなされた」と記したが、実際には「修復されてから寄贈」がなされている。以下が経緯であり、図書館への寄贈を前に、募金活動などの関係者の大変な尽力を以て、展覧会と寄贈が実現された。先の報告において、その前後関係に誤りがあったことについて、ご指摘を頂きましたことを感謝するとともに、深くお詫び申し上げます。
- 2000年5月: 阿部幸正氏・栗野善治氏らが資料を発見する
- 2000年9月: 早稲田大学稲門建築会に実測図面展の企画書を提出(後に実現)
- 2001年1月: 稲門建築会からの予算承諾を得て実測図面11枚の修復を実施
- 2001年5月: 帝国ホテル東京にて「建築に挑む図面表現の美」展を開催
- 2001年11月: 実測図面保存の募金協力を開始
- 2002年10月: 募金金額が確定し実測図面24枚を追加修復
- 2003年5月: 早稲田大学中央図書館へ実測図面・解体時記録写真を寄贈
- 4)本稿(その2)は、前田記念工学振興財団研究助成(平成29年度)による研究成果である。
- 5)旧帝国ホテルの保存運動の経緯については、桐敷真次郎:「帝国ホテル旧館の保存問題と保存運動の経過」,『建築雑誌』1968年5月号, 日本建築学会, 1968, pp. 11-18に詳しい。
- 6)「消える大正の名建築 帝国ホテル旧館 ついに取りこわしへ」, 朝日新聞 1967年3月16日(朝刊), 15面
- 7)前掲注5)「帝国ホテル旧館の保存問題と保存運動の経過」, p.11
- 8)座談会「帝国ホテルの旧館の保存について」,『建築雑誌』1967年11月号, 日本建築学会, 1967, pp. 98-107による。座談会は7月に開催されていたが、掲載されたのは解体が差し迫った11月であった。
- 9)「発足した「帝国ホテルを守る会」」,『新建築』1967年9月号, 新建築社, 1967, p. 90
- 10)発起人は、新規矩男、天野太郎、池辺陽、今泉篤男、浦辺鎮太郎、久保貞次郎、小塚新一郎、柴岡玄佐雄、清家清、滝口修造、道家忠道、遠山茂樹、羽仁五郎、羽仁説子、藤島玄治郎、藤本能道、星島二郎、松島栄一、三上次男、吉坂隆正、吉田五十八、吉村順三、吉屋信子の23人であった。
- 11)前掲注5)「帝国ホテル旧館の保存問題と保存運動の経過」, p.14
- 12)博物館明治村の対応は、前掲注1)『帝国ホテル中央玄関復原記』に詳しい。
- 13)明石信道:『旧帝国ホテルの実証的研究』, 東光堂書店, 1972, pp.409-418
- 14)福田晴彦:「帝国ホテルの保存」,『朝日ジャーナル』1967年6月4日号, 1967, pp. 98-105で、福田へのヒアリング調査によれば、本論考は横山正(1939-)とまとめられたものである。
- 15)前掲注5)「帝国ホテル旧館の保存問題と保存運動の経過」, p.13による。前野崑(1932-)からは「奥村らが中心となり保存運動をしていたことは知っているが、その内容の詳細については分からない」という証言をうかがうことが出来た。
- 16)沖種郎:「帝国ホテル旧館第3次保存運動」,『新建築』1967年9月号, 新建築社, 1967, pp.109-112
- 17)武藤章は1956年から亡くなる1985年まで工学院大学で教鞭を執っていた。
- 18)42枚の内訳は、実測図と思われる平面図が21枚と断面図が11枚で、コピーだと思われる各階平面図が10枚であった。
- 19)「帝国ホテル考える」,『新建築』1967年12月号, 新建築社, 1967, p.232には「宴会場・劇場回り南北断面」「宴会場・劇場回り東西断面」「玄関ロビー回り東西断面」の3枚の断面図が掲載されており、そのうち「宴会場・劇場回り南北断面」のキャプションには「縮尺1/250工学院武藤研究室の実測による」と記されている。
- 20)1965年度の実測調査に携わっていたのは、中村勝氏の他、トヨダカツミ氏、キミツカマサミツ氏、フクダトシオ氏、マツオカトモコ氏の4名である。
- 21)天野太郎は1955年から1962年まで、樋口清は1957年から1963年まで、それぞれ工学院大学で教鞭を執っていた。
- 22)デジタル化を行ったアルバム資料は全21冊、そのうち18冊が項目別でまとめられた写真アルバム、3冊がネガのベタ焼きのアルバムであった。
- 23)アルバムNo.1のP.8を筆者らがスキャンしたものである。
- 24)写真フィルムを印画紙に密着させて原寸プリントしたもの。
- 25)アルバムNo.17のP.8を筆者らがスキャンしたものである。
- 26)最小は「album0010-P.12-5」、最大は「album15-P.5-3」であった。
- 27)飯田喜四郎氏へのヒアリング調査(2016年7月15日実施)による。

[2018年1月19日原稿受理 2018年5月24日採用決定]